

さけます内水面と人と生き物とのかかわり

永田光博

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災では 1.5 万人を超える尊い命が失われ、未だ 8 千人近い人々が行方不明になっています。また、福島第一原発事故の被災者を含めて多くの人々が避難所での不自由な生活を強いられています。さらに北海道を含めて地域の基幹産業である水産業は壊滅的なダメージを受け、未だ復旧の目途すら立たない地域が多くみられます。お亡くなりになられた方々に対する哀悼と被災された皆様へのお見舞いを申し上げます。

さて、このたび河村前場長からバトンを引き継ぐことになりました。今後とも宜しく願い致します。私が旧道立水産孵化場えりも支場に入った昭和 50 年代は、さけますの資源作りを官民一体で進めており、現場にも多くの若手職員が加わり、それだけで活気に満ちた雰囲気を感じたものです。それから 30 年近い月日が経ち、さけますや内水面漁業を取り巻く環境も大きく様変わりしました。特に、平成 9 年以降、国のさけます事業が縮小し、統括管理業務が北海道へ移行することになると、支場の民間移行と組織の再編が急ピッチで進みました。平成 16 年には、増毛支場を道北支場、熊石支場を道南支場に名称を変更し、これまで空白地帯であった道東地域を管轄する道東支場を中標津町に、また内水面研究の拠点として道東内水面室を網走市に開場し、さけますと内水面資源の調査研究機関として全道展開できる体制を確立しました。しかし、改革の流れはこれで止まらず、平成 22 年 4 月にはふ化場という名前に別れを告げ、さけます・内水面水産試験場として他の 21 道立機関といっしょに一つの研究機構をつくり地方独立行政法人として再出発することになりました。

さけますと内水面魚種は全道の漁業、養殖業そして水産加工業といった産業への貢献はもちろんのこと、縄文時代から食糧として人々の生活を支え、今日では健康食品としての価値を高めています。また、シロザケは国内だけでなくアジアや欧米へ輸出され世界の食卓で高く評価されています。さらに、人々の生活圏と隣接する川や湖沼に生息する魚たちは、釣やレジャーなど娯楽や観光資源としても一役かっています。また、平成 17 年にユネスコの世界自然遺産に登録された知床半島に生息するさけますは海域と陸域との相互作用の鍵種に位置づけられました。野生のさけますは「さけは森の恋人」といわれるように陸上の動植物の生産を支えており、内水面に生息する魚たちは生態系サービスとして高い価値もっています。

一方で、河川湖沼の人為的改変やブラウントラウト等の外来種の増加による自然生態系の荒廃、さらには地球温暖化などさけますや内水面魚種が生息する環境への不安は増大しています。しかし、道内の在来淡水魚 59 種中、希少種を含めた 22 種が絶滅の恐れにあることは余り知られていません。不確実な将来にあつて、漁業者や遊漁者による在来資源の持続的利用を推進するためには、これら不安材料を科学技術の進歩により取り除くことが求められています。当時は、これまで生産者と培ってきた現場主義を大事にしながら最先端の研究知見を蓄積し、さらに道総研の他分野の仲間と連携してこれらの課題に取り組んでいきます。これまで同様にご支援とご協力をお願い致します。

(場長 ながたみつひろ)